

柴崎測量官が劔岳に登った日

日本測量協会 関西支所長
山田 明

昨年10月富山市で開催された「地図展」で、劔岳測量100年記念事業の一環として作られた、山岳集成図『劔・立山』（平成19年7月11日発行、国土地理院）が販売されていた。この地図の裏面にこの図の解説と資料があって、その中の、3) 劔岳の選点、には次のような記載がある。

劔岳の選点（当時の点の記では撰定）は、測量標原簿によると「明治40年7月13日撰定：柴崎芳太郎」と記されていますが、劔岳に明治40年何月何日に登ったかという記録は点の記がないため定かではありません。

100年間劔岳に柴崎測量官が登った日はわからなかったことになる。この記念事業に当初関わった私もこの登頂日には興味があり、このあと登場する松村氏と同じく、26点の点の記を並べ撰定月日と造標月日を書き出して並べたりしていた。柴崎測量官は登った日を日記に書いていないだろうか。平成16年2月、写真や資料をお借りするため柴崎家を二回も訪れながら、なぜかこのことを切り出せずにいた。

新田次郎原作の『劔岳・点の記』が木村大作監督により映画化され来年公開予定となっている。今年の2月に日本測量協会で木村監督を囲む会があり私も出席させていただいた。講演前の監督と話し合う集まりの中で「もうしばらくすると測量官も測手もいなくなります。今この時期にこの映画を撮ることはとてもよいタイミングだと思います」とお伝えした。

この原作者新田次郎氏が小説『劔岳・点の記』の執筆にあたり重要な資料とした「山書研究」第7号は昭和41年に発行された。この中の松村寿氏の『劔岳先踏前後2

一陸地測量部員の登攀一』では柴崎測量官の劔岳登頂について、冠字（景）のつくその26点の点の記から行動を追い登頂日を推理している。その部分を抜粋すると、（本文28ページ）とここで、この時頂上に建てられた四等三



角点は、三角点とはいっても高さ僅かに3メートルあまりの材木一本を針金で岩に固定しただけのもので、中央部には二枚の板を十字形に組んで取りつけた。十字形の板のすぐ下には短冊形の板片に「明治40年…」と建標の日付を墨書して打ちつけた。

この第二回登山は何日に行われたか。もしもこのとき四等ではなくて三等点の建設に成功していたならば、劔岳測点の「点の記」が残り、造標の日時や登山コースなどを正確に知ることができた筈である。だが今のところこの日時は全くわからない。おそらく天候さえ許したならば、第一回に引続いて、すぐに行われたのではないかと想像されるに止まる。板片に書かれた建標の日付は一年たたないうちに風雨にさらされてもう読めなくなっていた。

この時からちょうど40年がたった平成18年、松村氏は再びこの登頂に関わる日付けについて『山書月報』No.524に「劔岳に測量官が登った日」と題して小文を寄せていた。



(本文4ページ)「点の記」でその期間の測量隊の動静をうかがうと、

7月10日 別山造標、11日五越続(五ノ越続き、雄山頂上から黒部方面に延びる尾根上) 撰点造標と、立山室堂をベースとした作業が行われてい

て、12日に室堂を出て劔岳方面に向かったとしても無理はない。13日、16日には三井氏のご指摘とおりに伊折を中心に早月方面の気和平、出の禿の造標が行われているが、それまでにも同日に別方面で造標と撰点が行われている例も見えており、人手を分けて作業するケースも考えられよう。また、記者の質問に答えて柴崎測量官が登山の月日を口にしたとすれば、それは生田測夫による踏査の日付ではなく、ご本人が登山して四等三角測量標を建設してきた日付と考えるほうが妥当

なのではないかと思う。

しかし、踏査チームの登山日を前にずらすことは無理なので、私の考えではすぐ翌日にでも引き続いて三角標建設の登山が行われ、測量班としてはこの二回の登山が作業としてはワンセットと考えられていたのではないかと思う。

新田次郎『劔岳・点の記』では第二次の登山が行われた日を7月27日に設定されている。これは新田氏おとくいの気象データをもとにして梅雨明けと作業隊の造標作業の日程から推測されたものだが、もしこの日であったとしたら、柴崎測量官はそれから数日後の記者とのインタビューで三角点建設の日を13日でなく27日と答えていたことだろう。

富山の地図展に展示物の説明要員として、たまたま本院から出張してきた当時の測量成果係長宮本純一氏が柴崎測量官の登頂日を想定したパネルを見て、山岳集成図とこのパネル作成に係わった、同じく説明要員の北陸地方測量部石山信郎調査係長に「なんで？手簿あるよ。日付わかるよ」と話したことから柴崎測量官の登頂日が判明した。この会話のすぐ後で私は二人と会い、立ち話の中で石山係長は「柴崎測量官はこの手簿があったために、登ったかどうか他から疑われても、言いたい人には言わせておけと登頂日については一切弁明しなかったんでしょね」と言っていた。できれば地図展の前にこの事実が分かればここで公表できたのにと少し残念な思いが当事者としてあったかもしれないが、私も石山説にはそのとおりがかもしれないと賛同する。確たる証拠があるのだから誰かが調べれば分かるはずと思っていたことだろう。地図展会場には展示されなかったこの「四等観標高程手簿」を後日私は見ることができた。私には判読不能の文字があって正確なコピーにはなっていないが最も重要な日付「7/28」と、同じ集成図の図7の高低計算簿右欄最後の規標高「1.32」それと備考欄の記述に注目していただきたい。

この手簿の発見の経緯が知りたいと宮本氏に尋ねると「注意して探していません。あって当然で、皆知っているものだと思っていました。他の部号でも「四等規標高程手簿」は簿冊中に綴られています。手簿は永久

三角測量簿 第二 八号用紙	月日	番号	測点ノ 名称	全網	自規標下辺 全標杭	余網	点檢	備考
	7/ 28	(27)	劔岳		m 1. 32			本点ハ特殊ノ四等三角点ニシテ巻尺ヲ以テ測定センモノナリ

保存の測量記録ですし、標高を算出するには規標高が記載してある高程手簿は必要です。高程手簿をまとめて、柱石長を記載したものが高程記簿で、明治期に調製された点の記の更新には、現在も高程記簿を利用しています。そのため、発見したというより、あるものを紹介しただけです」なる返事が返ってきた。

一部の人にはとても重要なことが、それに係わっていない、興味のない人には全く琴線に触れることなくその人の前を通り過ぎて行くということは世の中には多々あるように思われる。国土地理院の職員であっても、少しばかり興味はあっても、なかなかこの手簿にまでは考えが至らない。私も劔岳に関して在職中には国土地理院の別館で成果表や点の記を見たり、原簿倉庫にも入って手簿、記簿、計算簿を見たりしたが、この手簿には至らなかった。やはり宮本氏の発見であると言ってよいと思う。

芳太郎氏の長男である芳博氏は昭和55年『山岳』75号に『劔岳登頂をめぐる一ある疑問点について』と題する16ページに及ぶ長い文章を寄せている。冒頭の1ページ目の後半で

「この父一行の登頂が、日本山岳会結成間もない頃であり、大きな反響をよび、特に明治42年吉田孫四郎氏一行が、二年前柴崎ら陸地測量部員の一行にしたがった宇治長次郎を案内人に雇って登頂を行い、『山岳』第5年1号に「越中劔岳」と題して第二登の記録を発表し、その中では亡父柴崎芳太郎の登頂についての疑問が提示された。これに対して亡父芳太郎は『山岳』第6年第1号(明44年)に反論と弁明を行っているが、その間の事情については当時の『山岳』誌上に、また戦後には山崎安治氏によって山岳誌『ケルン』(昭和34年

第3号)に、また松村寿氏による『山書研究』(昭和41年第7号)誌上に詳細な記録と研究がある」

ここでは芳太郎の登頂日には全く触れていない。芳博氏の疑問点は宇治長次郎の登頂についてであり、そのことについてこのあと様々な考察を述べている。『山岳』第6年第1号(明44年)に柴崎測量官が反論と弁明を行っているとはあるが、この中にも柴崎測量官の登頂日については何も書かれていない。

新田次郎氏の『劔岳・点の記』本文246, 247ページには次のように記載されている。

劔岳登頂についての公式記録はどこを探してもない。点の記は三等三角点までであって、四等三角点についての記録は無い。その義務がなかったこともあったが、もし柴崎測量官が劔岳だけは特別な場合として記録を残そうとしても、規則にしばられてそれはできなかったであろう。従って、測量官等が劔岳に明治40年の何月何日に登ったかという公式記録は何一つとしてなく、あるのは、当時柴崎測量官等の業績を報じた富山日報「越中劔岳先登記」の記事だけである。(略)247ページ、

私は7月12日を第一回目の登山日と断定して小説を書きすすめて行った。そして柴崎測量官等が自ら登山した第二回目の日は梅雨が上がった7月27日だろうと断定した。7月12日から後梅雨に入ると降雨量が多く、この最中に劔岳登山は無理だと考えたからであった。このように考えると、柴崎が点の記に書き残した他の三等三角点の日取りと矛盾しないからであった。

国土地理院(関東地方測量部)は「測量の日」記念行事の一環として今年の6月3日から5日にかけて新宿駅西口広場で「くらしと測量・地図」展を開催した。この中の「劔岳に挑んだ柴崎測量隊の記録」で柴崎測量官の劔岳登頂日を7月28日と明示し初めて公表した。

柴崎測量官が登った日から101年目、この7月28日に4年ぶりに劔岳に登る予定でいる。私にとっては8回目の劔岳である。🌊

(『三和』第37号から一部変更して転載)